

「欲求」の捉え方

— 「ヒューム主義」に関する一考察 —

林 誓雄

はじめに

筆者は以前、メタ倫理学での議論や枠組みは、ヒューム研究を行なうにあたり、いかなる功罪を持つのかという観点から考察を展開した¹。その結果、ヒュームのような古典研究に対してメタ倫理学は、一定程度の有用性を持つことを示したつもりである。今回、これとは逆に本稿において、ヒューム研究の観点から、メタ倫理学上の議論に対して、何か指摘できる点があるかどうかを検討してみたい。

メタ倫理学における人間の心理に関する標準的な理解、すなわち「信念-欲求モデル (belief-desire model)」は、マイケル・スミスの『道徳の中心問題』²の影響もあってか、そのモデルを採用する論者や研究のことを「ヒューム主義 (Humeanism)」³と呼ぶことが多い⁴。この「ヒューム主義的な」という名を冠する信念-欲求モデルに共通しているのは、次の二点である。

¹ 拙稿 [2009]「ヒュームにおける道徳感情と道徳的な行為の動機づけ」を参照。

² Smith [1994]からの引用・参照は、原書と翻訳（『道徳の中心問題』檜 則章 監訳、ナカニシヤ出版、2006年）の頁数を併記して示す。

³ 「ヒューム主義」は、(a) 道徳的な行為の動機づけに関する「信念-欲求モデル」という意味で用いられる場合と、(b) 道徳的評価の認知性に関する「非認知主義」を指す場合のどちらかであることがほとんどだが、その他にも (c) 「実践理性に関する道具主義」を意味する場合 (Millgram [1995])、(d) 「存在と当為の峻別 (is-ought gap)」に関する何らかの立場を示す場合、さらには (e) 「ありとあらゆる「間」に注目し、そこにおいて垂直的な平均台を打ち立てるような「建設的哲学」の態度をとること」(中村 [2008]) と解される場合もある。本稿では一貫して、(a) の意味で「ヒューム主義」を用いる。

⁴ マイケル・スミスのヒューム主義とヒュームの実際に論じていることとの比較検討については、すでに奥田太郎が論じている (奥田[2004])。また、倫理学研究における「ヒューム主義」の歴史的変遷についても、同じく奥田が綿密な研究を行なっている (奥田[2010])。

第一に、信念と欲求とは別種の存在だとする点で共通する⁵。第二に、信念には、それ自体に動機づけの力がなく、欲求の助けなくして行為を動機づけることはできないとする点で共通する。

他方、そのモデルの内実、特に [A] 欲求の内実、および [B] 信念と欲求との間の関係性については、論者によって捉え方がまちまちである。具体的には、[A-1] 欲求を、命題的内容を持つものとして特徴づける場合と⁶、[A-2] 欲求を「快への欲⁷/苦に対する嫌悪」というある種プリミティブなものとして捉える見解とにわかれる⁸。また、[B-1] 信念に欲求を引き起こす影響力を認める立場と [B-2] 認めない立場の間でも、対立が認められる。

以上の[A]と[B]それぞれの主張を組み合わせることで、ヒューム主義的な信念-欲求モデルは、大きく次の四パターンに分類することができる（次頁の【表-1】を参照）。以下では、考察に値する重要度という観点から、四つの立場すべての主張について考察はせずに、[A]の相違点に焦点を絞って論じる。その際、

⁵ 周知のとおり、ヒュームは人間の心に現れるものを「知覚 (perception)」と呼び、それを「印象 (impression)」と「観念 (idea)」の二つに分けるが、このうち「観念」の区分内に「信念 (belief)」が含まれる。他方、「欲求 (desire)」は「印象」に属するものとされる。信念とは、印象を表象（再現）する性質をもち、それゆえ信念の内容は真偽の対象となるので理性的な批判を受けうる。これに対し、欲求とはそれ自体が原初的 (original) な存在であって、何かを表象するという性質を持たず、それゆえに真偽の対象とならないので理性的な批判を受けない (T 2.3.3.5; SBN415, T 3.1.1.9; SBN458)。

⁶ メタ倫理学において「信念-欲求モデル」が引き合いに出されるほとんどの場合、ある主体に欲求を帰属させるとき、「S は p を欲求する (S desire that p)」という形で述べられることが多く、その場合の p は文である。desire to do という不定詞形で欲求に言及される場合も、その欲求を desire that φ という形にパラフレーズすることを認めるのであれば、不定詞形で言われる欲求も命題主義的に捉えられていると考えてよいだろう。例えば、動機づけをめぐる議論を取り扱う田村圭一 [2004]は、「外在主義」について説明する文脈で、「ヒューム主義 (信念-欲求モデル)」と「外在主義」とを親和的なものとして捉えながら、(おそらくは)「信念-欲求モデル」のもとで考えられた「欲求」の例として、「子供を虐待しない欲求」というものを挙げる (田村 [2004] p. 60)。この欲求は、desire that p の形で、つまり命題主義的に捉えられている。Smith [1994/2006] p. 107 / 143 頁も参照せよ。

⁷ 原語は desire だが、「信念-欲求モデル」で捉えられるものとしての「欲求」との区別をつけるために、「欲」と表記する。

⁸ これらの他に、例えば D・デイヴィドソンのように、欲求を「賛成的態度 (pro-attitude)」として捉えるやり方もあるだろう (Davidson [1980/1990] pp. 3-4 / 3 頁)。今回検討するのはヒューム主義に関するものなので、デイヴィドソンの「賛成的態度」という捉え方についての検討は別稿に譲りたい。

[A-1]の代表的見解としてマイケル・スミスを、[A-2]の代表的見解として M・M・カールソンを取り上げる。

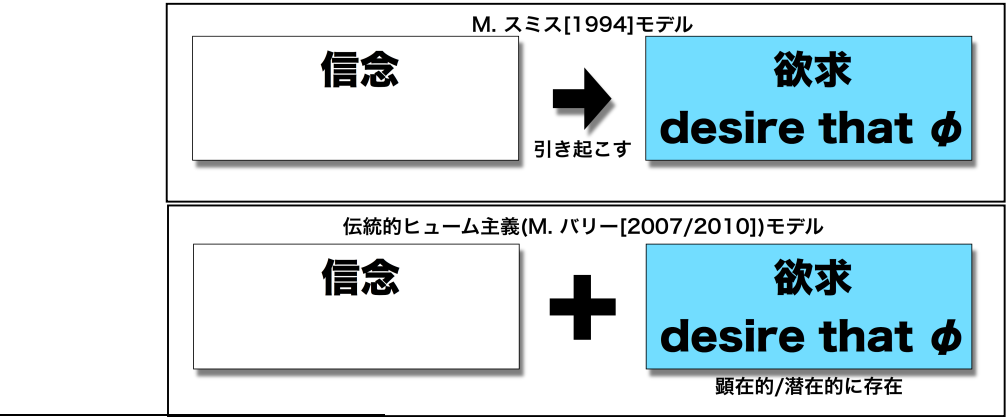
【表 1】

	[B-1]	[B-2]
「信念-欲求モデル」における欲求は、	認知的状態（信念）によって 引き起こされる.	認知的状態（信念）とは 独立・先行して存在する.
[A-1] 命題的内容を持つ.	M・スミス[1994]	M・バリー[2007, 2010]
[A-2] 快への欲/ 苦に対する嫌悪.	M・M・カールソン[2006]	N・シンハバブ[2009]

1. 欲求の命題主義的な捉え方とその問題点

ヒューム主義的信念-欲求モデルでは、大雑把に言って〈“手段 A によって目標 G が達成される” という信念〉と〈目標 G への欲求〉とが、何らかの仕方で結びつくことによって行為が動機づけられる、と説明される。

この「信念と欲求との結びつき」に関して、例えばマイケル・スミスは信念が欲求に及ぼす影響を、すなわち欲求が信念によって引き起こされることを認める一方で、M・バリーは、それを認めない⁹（以下の図を参照）。



⁹ 詳しくは Barry [2007, 2010]を参照。

とはいえ、その論争の如何にかかわらず、両者の信念-欲求モデルが共有する点、すなわち「欲求の命題主義的な捉え方」は「信念-欲求モデル」を支持/維持する上で深刻な難点を抱えることになる。そこで、以下ではその難点について、マイケル・スミスの議論を検討の俎上にのせながら、確認することにした。

1.1 マイケル・スミスによるヒューム主義的信念-欲求モデル

マイケル・スミスはまず、ヒューム自身の欲求の捉え方について検討し、これを「強い現象論的な捉え方」¹⁰と位置づけた上で退ける。その際にマイケル・スミスが挙げる理由は、[1] 欲求の本質が現象論的性質を持つことのみに帰されているために、自分の欲求を誤認する¹¹という事態を説明できないこと、および [2] 欲求が命題的内容を持つことを説明できないこと、以上の二つである (Smith [1994/2006] p. 107 / 143 頁)¹²。

そこでマイケル・スミスは、「ヒューム主義」の大きな枠組み、すなわち「信念-欲求モデル」は維持しつつも、欲求については、それを「一定の条件下で一定の仕方で行為する傾向性 (disposition)」として捉えるという見解を打ち出す¹³。

¹⁰ 「強い現象論的な捉え方」とは、「欲求は刺激感覚と同様に、まったく本質的に一定の現象的内容を持つ状態にほかならないという見解」と説明される。具体的には、私が欲求を持っているとき、私は身体的な刺激感覚に似た心理的感覚を持っている。そして、欲求とはそのような感覚のみによって知られるという捉え方のことを指す (Smith [1994/2006] p. 105 / 140 頁)。

¹¹ 他の言い方をすれば、「私は^{ファイ}φしたい」という欲求の命題文は、それが行為として発現する時点における現象論的な現れ方とは別に、その後の時点になって真偽が分かるものになるということである。「私は音楽家になりたい」という欲求が、母が死んだのち、それが本当は偽であったことが分かる男の例をマイケル・スミスはあげている (Smith [1994/2006] pp. 106-7 / 142 頁)。

¹² しかしながら驚くべきことに、欲求が命題的内容を持つ点について、マイケル・スミスはマーク・プラッツの議論を踏襲するのみで、その妥当性については検討がなされていない (Cf. Platts [1979] p. 76)。

¹³ 詳しく述べれば、^{ファイ}φしたいと欲求することは、条件 C においては^{ブサイ}ψを行なう傾向性、条件 C'においては^{カイ}χを行なう傾向性などの、様々な傾向性の集合を持つことであり、しかも条件 C や C'が成り立つためには、主体はなによりもまず、当の欲求とは異なる一定の他の欲求と、さらに目的-手段に関する一定の信念を持ち合わせていなければならない、という捉え方である

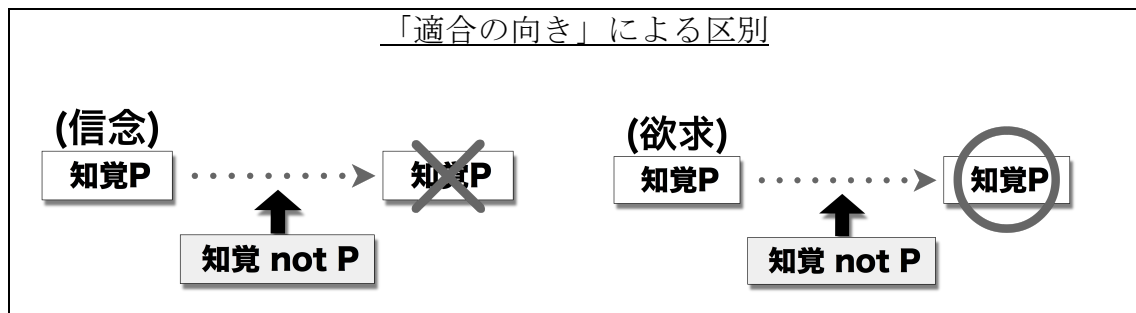
このときマイケル・スミスは、上記の [1] 欲求の誤認可能性ということ以上に、[2] 欲求が命題的内容を持つということの方を、欲求理解にとって、より重要だと主張する。そこで、こうしたマイケル・スミスの欲求理解を、本稿では「命題主義的な捉え方」と呼ぶことにする。

ところで、マイケル・スミスにおいて「欲求が命題的内容をもつ」は、「欲求が信念の要素を含む」ということと同義で用いられている¹⁴。しかし欲求に信念の要素を含ませてしまうと、欲求と信念との違いが不明瞭になるという重大な懸念が生じる。それは、「信念と欲求とが別種のものである」という、ヒューム主義的信念-欲求モデルの根幹を揺るがす懸念である。マイケル・スミスはこの懸念に対し、欲求と信念にはそれぞれに異なる「適合の向き (directions of fit)」があると考えることで、それらの区別を維持し続けることが可能だと主張する。

マイケル・スミスの説明によると、「p でない」という内容を持った知覚が現れた場合、「p である」という信念は存在しなくなる傾向がある。これに対し、「p である」ことへの欲求は、「p でない」という内容を持った知覚が現れたとしても消え去ることはなく、欲求主体を p の実現に向かわせながら存在し続ける傾向がある。これが「適合の向き」の考え方である（次頁の図「「適合の向き」による区別」を参照）。「適合の向き」の違いによって信念と欲求とを見分けることで、上記の懸念は払拭されることになる、そのようにマイケル・スミスは主張する (Smith [1994/2006] p. 115 / 153 頁)。

(Smith [1994/2006] p. 113 / 151 頁)。

¹⁴ そもそも「欲求が信念の要素を含む」とは、マイケル・スミスが引いてくるプラッツの指摘である。ところで、プラッツが「欲求が信念の要素を含む」ということで意味していることは、欲求が信念の「適合の向き (心的状態→世界)」を持つということであった (Smith [1994/2006] p. 112 / 149-50 頁)。他方、マイケル・スミスは「適合の向き」を、「p である」という信念と「p である」という欲求との違いを示すものとして用いているだけであり、マイケル・スミス自身が意味する「欲求が信念の要素を含む」とはむしろ「欲求が命題的内容をもつ」ということである (Smith [1994/2006] p. 115 / 153 頁)。



1.2 「適合の向き」の難点

命題主義的な欲求の捉え方によって信念との区別がつかなくなるという懸念を、マイケル・スミスは「適合の向き」という考え方によって払拭しようとする。しかし、彼の「適合の向き」についての捉え方は、いくつかの点で、信念と欲求の関係についてうまく説明できていないとされる (Sobel & Copp [2001], Coleman [2008], 河島[2010] etc.)。まずは、河島一郎による批判について見てみよう。河島の批判は、マイケル・スミスが言う〈「 p でない」という内容を持った知覚 (以下「 $\neg p$ の知覚」と表記する)〉ということで、何が意味されているのかに焦点が当てられる。

第一に、「 $\neg p$ の知覚」が、「信念 $\neg p$ 」を生み出す状態なのであれば、「信念 p は信念 $\neg p$ とは両立しないのに対し、欲求 p と信念 $\neg p$ は両立可能である」というように、信念を持ちだすことで「適合の向き」の違いを説明することが可能になる。ところでこの説明では、信念を分析するために「信念の相互関係」に訴える一方で、欲求を分析するためには「欲求の相互関係」ではなく、欲求とそれ以外のもの (ここでは「信念」) との関係を持ち出している。しかし、信念の場合に信念の本質的特徴を持ち出して説明するのであれば、欲求の場合にも、欲求の持つ本質的特徴に訴えなければならないだろう¹⁵。それゆえマイケル・スミスの説明は、信念と欲求の「適合の向き」が逆向きであることを適切

¹⁵ この点について河島は、Humberstone [1992]の *mutatis mutandis* 論法を援用している。

に説明するようなものとは言えないので失敗しているのである¹⁶。

第二に、第一のパターンとは異なり、「 $\neg p$ の知覚」が「信念 $\neg p$ 」を含意するものではないとする。しかしその場合、信念とは独立に、何らかの知覚が「 $\neg p$ 」という内容をもつと考えることはそもそも困難であるし、その知覚が「 $\neg p$ 」という確定した内容をもたないとしても、それが p という確定した内容をもつ信念と両立不可能な関係に立つということも理解し難い。結局、第二のパターンでは、信念を含意しないにもかかわらず、信念の命題内容に対して可感的であるような内容が知覚に備わっているという不可解なことを認めねばならなくなる。以上の二パターン双方において、「適合の向き」の説明がうまくいっていないことから、河島はマイケル・スミスの説明が失敗していると断じる¹⁷。

さらに、マイケル・スミスの「適合の向き」の説明に対しては、別の点に着目した批判もある。マイケル・スミスによれば、「 p でない」という内容を持った知覚が現れるとしても、「 p である」という知覚が存在し続ける傾向を持つのであれば、その知覚は「欲求」と認定されるのであった (Smith [1994/2006] p. 115 / 153 頁)。しかしソーベル&コップは、知覚「 p でない」が現れると存在しなくなってしまう傾向をもつような欲求が存在することも可能であろうと批判する。

例えば、関西在住のミスターM という人物は、自分が阪神タイガースの熱烈なファンであると言っているとする。そして、ミスターM は阪神タイガースが試合に勝って欲しいと常日頃から思っている。ところで、ミスターM がどのチームを応援するかは、チームそれぞれの直近の勝ち負けに応じてコロコロ変わるものとしよう。そうすると、阪神タイガースが試合に勝たなくなることで、先のミスターM の欲求は、存在しなくなる傾向をもつと言える (Cf. Sobel&Copp [2001] p. 48)。

¹⁶ 河島 [2010] pp. 63-4

¹⁷ 河島 [2010] p. 64

さらに、ソーベル&コップによれば信念についても、「適合の向き」という考え方はうまく説明ができないという。例えば、「今日雨は降らない」とハヤシという人物が確信しているとしよう。ところがハヤシは大量の真っ黒な雲が近づいてくるのを見て、雨が降りそうだとすることに同意するとする。しかし、現象が、持っていた確信に反していることをハヤシが認めるのだとしても、ハヤシが自分の主張に自信を持ち続けることはありうることである。このときハヤシが、自分の信じていると考えているものを信じておらず、むしろ単に自分の主張が真であって欲しいと望んでいるに過ぎない、とは限らないだろう。別の事例を出せば、ハヤシは、 $2+2=4$ であると確信している。そして、この確信を消し去ってしまうような傾向をもつ、新たな認知的状態など存在しない。しかし、not P という知覚が存在しないからといって、ハヤシが $2+2=4$ を信じていない、つまり $2+2=4$ というハヤシの信念は「信念」ではないことにはならないだろう (Sobel&Copp [2001] pp. 47-8) ¹⁸。

かくして、信念と欲求双方について、いくつかの点でマイケル・スミスの「適合の向き」の考え方はうまく説明できないように見える。もしマイケル・スミスが、これらの批判に的確に応じることができないのであるなら、欲求の「命題主義的な捉え方」は、信念と欲求の違いを不明瞭にってしまうという致命的な難点を抱えこんだままということになるだろう。マイケル・スミスにおいてはこの難点を克服しない限り、「信念と欲求とは別個の存在である」という「信念-欲求モデル」の根幹の一つを維持することは難しくなるのである¹⁹。

¹⁸ ソーベル&コップの議論を継承しながら、「適合の向き」をさらに批判したものとして、Coleman [2008]を参照。

¹⁹ このことは、ともすれば「信念-欲求モデル (ヒューム主義)」それ自体が間違っているという結論を導くことに繋がるかもしれない。そしてその結果、メタ倫理学における動機づけの議論を「反ヒューム主義」へと傾かせる流れに棹さすことにもなりかねない。マイケル・スミスが擁護する「信念-欲求モデル」を批判することで、反ヒューム主義の優位を示そうとする論考は数多く見られる。例えば、G・F・シェラーは、マイケル・スミスの「信念-欲求モデル」では、信念と欲求が「適切に関係づけられて」いなければならない、それらが「動機づけ理由」を構成するために、行為者はそれら一組の信念と欲求をひとまとめにしなければならないとす

2. ヒューミッシュモデル：欲求の快樂主義的な捉え方

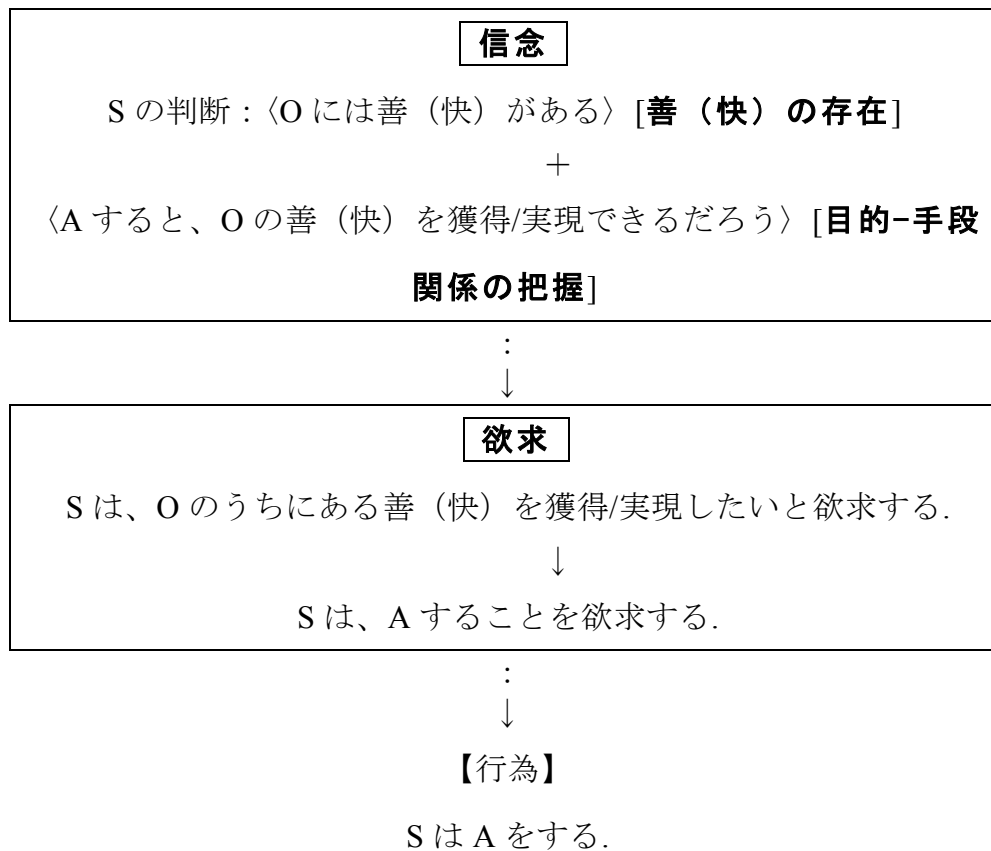
「適合の向き」という考え方が破綻を来すことが認められ、信念と欲求とを区別するものとして「適合の向き」以外の説得力ある議論が提示されないのであれば、欲求の命題主義的な捉え方が間違っていると考えざるを得ない。しかしそれでも、信念-欲求モデルを維持し続けようとするのであれば、命題主義的ではない欲求の捉え方なるものを探しださねばならない。そこで本稿は、信念-欲求モデルにおける欲求を「快への欲」「苦に対する嫌悪」として捉える M・M・カールソンの研究に着目する。

カールソンは、マイケル・スミス流のヒューム主義的信念-欲求モデルや、それに批判的なジョン・マクダウェル、トマス・ネーゲルらの認知主義的動機づけモデルを斥けながら、「ヒューミッシュ (Hume-ish) 信念-欲求モデル」こそが、それらよりも一層妥当な行為の説明を提出できると主張する。そして「あるものが快を持ち合わせている」という信念と、「ある仕方で行為することによってこの快が実現されるかもしれない」という信念によって、その快を求めようとする欲求が引き起こされ、この欲求によって行為が動機づけられるという枠組みを提示する²⁰（次頁の図「ヒューミッシュモデル」を参照）。

る。しかし、この「ひとまとめにしなければならない」という点は、行為者が自分の欲求に気がついていなければならないことを含意するが、それでは「欲求の誤認可能性」と矛盾するがゆえに、「ヒューム主義」は斥けられるべきと論じられる (Schueler [2009])。

²⁰ なお、カールソンの見解の紹介に当たっては、今回の考察に沿うように、用語の変更などを適宜施している（例：「認知 (cognition)」→「信念 (belief)」など）。

【ヒューミッシュモデル】



カールソンは、行為や動機づけのメカニズムについて説明する際に次のことを重視する。すなわち、〈行為の理由〉と〈行為の動機〉とを明確に区別すること、および〈理由〉と〈動機〉との間の結びつきを妥当な仕方で説明できることとの二つである。カールソンが提示する上の図式では、信念ボックスが〈行為の理由〉を構成し、欲求ボックスが〈行為の動機〉を構成しているとし、さらに、この〈行為の理由〉が、善（快）をブリッジにすることで²¹、〈行為の動機〉を正当化し、さらにはそれによって帰結する行為も正当化するという²²。

²¹ カールソンは、ヒュームが快（pleasure）を善（good）と同一視していることを前提しながら議論を進めている。だが、ヒュームが善＝快と言っているときの「善」はかなり広い意味で用いられており、それを「道徳的な善」を直に意味しているものとして扱うことの是非については、更なる考察を要するだろう。

²² Karlsson [2006] p. 250

(マイケル・スミス流の) ヒューム主義モデルにおける行為の理由の本質は、〈その人が何かを欲求しているということ〉および〈ある行為を通してそれを獲得する方法について分かっていること〉に存している。しかしマクダウェルによると、ヒューム主義モデルは、なぜその行為が、するに値するものなのかについて明らかにしていない点で不十分である。なぜなら、誰かがあるものを単に欲しているということだけでは、それが〈追求に値するもの〉にはならないし、そのためにその欲求に従って行為したことが正当だとは評価できないからである²³。

他方、カールソンによれば、マクダウェルが提出する認知主義的動機づけモデルも、〈行為者の理由〉が、〈その人が善と考えているもの〉とどのように結びつくのかを示し損ねており、結局動機づけのプロセスを説明する上で穴があると指摘される²⁴。マクダウェル流に〈A することによって自分が目標 G を実現/達成できる〉と誰かが判断/認知 [=信念を持つと] しても、その人が、ふさわしい条件下（例えばある徳を持つ）にいないのならば、〈行為の理由〉としては役に立たないことがある。なるほど、ふさわしい条件下にいる行為者 [=有徳な行為者] にとってその信念は〈A すること〉を好ましい観点に置き、そのために行為を動機づけるだろう。しかしその同じ信念は、他の有徳でない行為者にとってみれば、有徳な行為者の場合と同じ働きをしないことがある。つまり〈A すること〉を好ましい観点に置くことがないために、行為 A を動機づけることにはならないのである。かくして、マクダウェル流の行為者の理由（信念）は、それが指示する行為をうまく正当化することができない。その原因は、〈行為者の理由〉と〈善に向かって行為すること〉との間に結びつきがないからである²⁵。

²³ McDowell [1978] pp. 13-29, McDowell [1982] pp. 301-5

²⁴ Karlsson [2006] p. 253

²⁵ Karlsson [2006] p. 251

これに対し、カールソンの持ち出すヒューミッシュモデルでは、〈行為 A を遂行する行為者の理由〉は〈行為者が何らかの目標 G を善だと判断し、それとともに A することで自分が G を実現/達成できると判断すること〉である。この信念（理由）は、善（快）の存在、およびその獲得手段を示しているがゆえに、動機（欲求）を引き起こし、行為を導くことが可能となる [妥当な動機づけのプロセスを提示]。それだけでなく、ヒューミッシュモデルにおいて〈行為者〉は、〈何らかの善を実現するため（ある悪を回避するため）に行為するもの〉なのであり、このことが、〈行為の理由〉によってその行為が正当化されることを意味する。なぜなら、〈その行為 A を好ましい観点に置く〉ことは〈その行為を、快を獲得するための手段として見ている〉ということだが、それは〈その行為を、善を獲得するための手段として見るべき〉ということだからである [行為と動機を正当化するプロセスを提示]²⁶。

3. ヒューミッシュモデルの検討

以上のように、「信念-欲求モデル」において欲求は、カールソン流の快樂主義的な捉え方、すなわちヒューミッシュモデルを採用するのが妥当であるように思われる。とはいえ、ヒューミッシュモデルに全く問題がないのだろうか。もしかすると次の点が、疑わしく思われるかもしれない。すなわち、上掲の図【ヒューミッシュモデル】の欲求ボックスの中には、少なくとも欲求が二つ登場している。このように、〈快それ自体への欲求〉と〈その快を獲得するための手段への欲求〉との二つを併存させる形で「欲求」とすること、言い換えると「欲求」を、複合的/重層的な構造をもつものとして描くことは、「信念-欲求モデル」における欲求の捉え方として問題になるのではないかと。

²⁶ Karlsson [2006] pp. 246-53

このような疑念はおそらく、「信念-欲求モデル」の「欲求」が、マイケル・スミス流の「ヒューム主義」が示すような〈目標 G への欲求〉や、プリミティヴな〈快への欲/苦の回避〉という単一のものとして捉えるべきだという前提に依拠することで生じるものと思われる。しかしながら、この前提が正しいということは、何らかの仕方で立証されているわけではなく、そのためにその前提に依拠しなくてはならないということにもならない。むしろ、信念ボックスの中で、[1] 快の存在、および [2] それを獲得する手段についての認知が提示されているのだから、欲求ボックスにおいてもその両方に対応するように複数の欲求が要請されることになると思われる。

あくまで欲求を、〈快への欲/苦の回避〉という単一のプリミティヴなものと捉えることを基盤とするのであるならば、それ自体には快が含まれていない「手段」を欲求するというのは、奇異に聞こえるかもしれない。しかしながら、なるほど、快を得るための「手段」それ自体には快が含まれていないとはいえ、その「手段」は最終的に目指す「快」と、関連性を有してはいる。この「快」との関連性という点で、プリミティヴな意味での欲求の発動が認められるとするならば、「手段を欲求する」という表現が許されてもよいのではないかと筆者は考える。しかしその表現の仕方はやはり改変が必要であり、「目指す快と関連性を有している手段を、その快のために欲求する」とする必要があるだろう。

とはいえ、そもそも、「手段を手にする」、すなわち「行為を遂行する」ためには何らかの欲求を必要とすると考えることは、それこそが本稿冒頭で述べた意味での「ヒューム主義的な捉え方」と言えるだろう。逆に、「手段への欲求」を認めずに、「直近の快苦にのみ動かされるような欲求」しか許容しないのであれば、何らかの手段を用いて目的を達成するという、われわれ人間の普通に見られる営みを説明できなくなるのである。

おわりに

メタ倫理学の議論において頻出する「信念-欲求モデル」は、論者によっていくつかの点で相違を見せる。本稿では、その中でも特に、「欲求」の捉え方の違いに焦点を当てて考察を進め、欲求についての〈命題主義的な捉え方〉と〈快樂主義的な捉え方〉との二つを検討してきた。そして、前者（特にマイケル・スミスの議論）の説明のうちに登場する「適合の向き」に関して不具合が見られることから²⁷、後者を支持する道筋を得た。すなわち、「信念-欲求モデル」において欲求は、カールソン流の快樂主義的な捉え方＝ヒューミッシュモデルを採用するのが妥当である、そう本稿は結論する。

ところで、カールソン流のヒューミッシュモデルは、「信念と欲求とが別種の存在である」ことを認め、さらに「信念には、それ自体に動機づけの力がなく、欲求の助けなくして行為を動機づけることはできない」とするために、「ヒューム主義」の本流をいくものだと言える。しかも、この二点に加え、欲求を快樂主義的なものとして捉えている点は、ヒュームのテキストに一層沿ったものであるために、いわゆる「ヒューム主義」以上に「(真正の) ヒューム主義」であるとさえ言えるようにも思われる。

しかしながら、実はこのヒューミッシュモデルは、ネーゲルが言う意味での「反ヒューム主義 (Anti-Humeanism)」の要素を持ち合わせてもいる²⁸。すなわち、ヒューミッシュモデルでは、「認知 (信念)」に「欲求を引き起こす力」が認められる点が「反ヒューム主義的」なのである。このことについてネイル・

²⁷ もちろん、本稿で紹介した批判は、現時点ではマイケル・スミスの「適合の向き」の考え方にのみ当てはまるものである。マイケル・スミスの「適合の向き」の考え方は、そのアイディアの祖とされるアンスコム (Anscombe [1957]) や、アンスコムを受け継ぐサール (Searle [1979]) のものとは異なる可能性があり、彼女らの「適合の向き」の考え方については、改めて検討する必要があるだろう。そしてまたアンスコム、サール、マイケル・スミスとはまた異なる「適合の向き」の考え方が存在する可能性もあり、それらについても検討が必要であろう。しかしそれらについては、今後の課題としたい。

²⁸ Nagel [1970]

シンハバブは、「理性は情念の奴隷である」というヒュームの有名なフレーズで述べられているのは、「欲求が、実践的推理を行なうにあたって必要不可欠となる前提条件である」と解釈し、逆に、仮に欲求が「認知（信念）」によって変えられてしまうのであれば、理性は情念の奴隷というよりもむしろ、情念の主人になってしまうとする。それゆえ、「認知（信念）」に「欲求を引き起こす力」を認めることは「反ヒューム主義的」だと特徴づける²⁹。

だが、シンハバブをはじめ、ネーゲル流の「反ヒューム主義」的理解は、「理性は情念の奴隷である」というフレーズの辛辣さに、ただ踊らされてしまっているだけのように筆者の目には映る。というのも、ヒュームは、信念によって欲求が引き起こされることを明らかに認めており（T 1.3.10.3; SBN119）、また理性（信念）によって情念が消えてしまうことについて、具体例とともに次のように述べるからである。

想定されているものが偽であることを、あるいは手段が不十分なものであることを把握するやいなや、われわれの情念は、まったく対立することなくわれわれの理性に屈する（our passions yield to our reason）。私があるフルーツを素晴らしい風味を持つものだと考えて欲求するとする。しかし、あなたが私に、私の間違いを納得させてくれる場合にはいつでも、私の切望は消え失せるのである。（T 2.3.3.7; SBN416）

「理性は情念の奴隷である」と宣言された三段落後で、ヒュームは「情念は理性に屈する」とも述べる。後者の言を、前者の言と同様の重みでもって受け止めるならば、「認知（信念）」に「欲求を引き起こす力」を認めることは、ネーゲル流の「反ヒューム主義」ではあっても、ヒュームに由来するという意味での「ヒューム主義」なのである。

²⁹ Sinhababu [2009] pp. 465-6

以上に見てきた通り、メタ倫理学においては、今現在も様々な「ヒューム主義」と「反ヒューム主義」についての解釈が提出され続けている。そしてそれはもはや、ヒューム自身のテキストを離れて論じられている感さえある。そのためにかえって議論が混乱を来し、有益な結論が導かれないままであるように思われる。それゆえ、ヒューム研究の観点から、メタ倫理学における「信念-欲求モデル」、すなわち「ヒューム主義」をめぐる議論に、あえて何か指摘するのであれば、それは結局のところ「まずはヒュームのテキストに帰れ」ということ以外にはないと考えられる。

参考文献

- Anscombe, G. E. M. [1957] *Intention*, Ithaca, NY: Cornell University Press. (菅豊彦 訳『インテンション：実践知の考察』産業図書、1984年)
- Barry, M. [2007] “Realism, Rational Action, and the Humean Theory of Motivation,” in *Ethical Theory and Moral Practice*, vol.10, No.3, pp. 231-42.
- Barry, M. [2010] “Humean Theories of Motivation,” in *Oxford Studies in Metaethics*, ed. by Shafer-Landau, R., Oxford University Press.
- Coleman, M. C. [2008] “Directions of Fit and The Humean Theory of Motivation,” in *Australasian Journal of Philosophy*, Vol.86, No.1, pp. 127-39.
- Davidson, D. [1980] *Essays on Actions and Events*, Oxford U. P. (服部裕幸、柴田正良 訳『行為と出来事』勁草書房、1990年)
- 林誓雄 [2009] 「ヒュームにおける道德感情と道德的な行為の動機づけ」『倫理学年報』第58号、日本倫理学会、pp. 93-107.
- Humberstone, L. [1992] “Direction of Fit,” in *Mind*, 101, pp. 59-83.

Hume, D. [1739-40] *A Treatise of Human Nature*, ed., by Selby-Bigge, L.A., 2nd Ed Oxford Clarendon Press, 1978; eds., by Norton, D. F. & Norton, M. J. 1st Ed, Oxford U. P., 2000. (デイヴィッド・ヒューム『人性論』1-4巻、大槻春彦 訳、岩波文庫、1948-1952年、デイヴィッド・ヒューム『人間本性論〈第1巻〉知性について』木曾好能 訳、法政大学出版局、1995年；デイヴィッド・ヒューム『人間本性論 第二巻 情念について』石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦 訳、法政大学出版局、2011年；デイヴィッド・ヒューム『人間本性論 第三巻 道徳について』伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一 訳、法政大学出版局、2012年)〔ヒューム『人間本性論』からの引用・参照は、略号としてTを用い、はじめに Norton 版の巻、部、節、および段落の番号をアラビア数字で順に付し、次に Selby-Bigge 版の頁数を付す。〕

Karlsson, M. M. [2006] “Reason, Passion, and the influencing Motives of Will,” in *Blackwell guide to Hume’s Treatise*, ed. by Traiger, S., Blackwell Publishing pp. 246-52.

河島一郎 [2010]「適合の方向と行為者」『行為論研究』第一号、行為論研究会 編、pp. 55-69.

McDowell, J. [1978] “Are moral requirements hypothetical imperatives?,” *Proceedings of Aristotelian Society*, Suppl. 52, pp. 13-29.

McDowell, J. [1982] “Reason and action- III,” *Philosophical Investigations*, 5 (4) , pp. 301-5.

Millgram, E. [1995] “Was Hume a Humean?,” in *Hume Studies*, Vol.XXI, No. 1, pp. 75-93.

Nagel, T. [1970] *The Possibility of Altruism*, Oxford: Oxford University Press.

中村隆文 [2008]「ヒューム主義であるとはどのようなことか？」『千葉大学人文社会学研究』No.17、千葉大学大学院人文社会学研究科、pp. 1-17.

- 奥田太郎 [2004] 「マイケル・スミスのヒューム主義とヒューム道徳哲学の比較検討の試み」『実践哲学研究』第 27 号、京都大学 実践哲学研究会、pp. 1-28.
- 奥田太郎 [2009] 「現代倫理学における「ヒューム主義」の系譜と起源」イギリス哲学会関西部会報告（未刊行）.
- Platts, M. [1979] “Moral reality and the end of desire,” in Platts, M. ed., *Reference, Truth and Reality*, London: Routledge and Kegan Paul, 69-82.
- Schueler, G. F. [2009] “The Humean Theory of Motivation Rejected,” in *Philosophy and Phenomenological Research*, LXXVIII, No. 1, pp. 103-22.
- Searle, J. R. [1979] *Expression and Meaning*, Cambridge U. P. （山田友幸 監訳『表現と意味』誠信書房、2006 年）
- Sinhababu, N. [2009] “The Humean Theory of Motivation Reformed and Defended,” in *Philosophical Review*, Vol. 118, No. 4, pp. 465-500.
- Smith, M. [1994] *The Moral Problem*, Blackwell. （マイケル・スミス『道徳の中心問題』檉則章 監訳、ナカニシヤ出版、2006 年）
- Sobel, D. & Copp, D. [2001] “Against Direction of Fit Accounts of Belief and Desire,” in *Analysis*, Vol. 61, pp. 44-53.
- 田村圭一 [2004] 「道徳的な実在論と道徳的な動機づけ」『思想』5 月号、岩波書店、pp. 59-74.

付記 1：本稿は、平成 24 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

付記 2：本稿は、2010 年 10 月 8 日に慶應義塾大学において開催された日本倫理学会大会ワークショップ「動機付けと実践理性について：『ヒューム主義』の罪」での発表、および 2011 年 3 月 24 日に南山大学において開催された「「信念／欲求」心理モデル研究会」での報告に基づいている。当日、会場にて有益なご指摘をいただいた先生方にこの場を借りて心よりの御礼を申し上げます。特に、奥田太郎先生、中村隆文先生、佐々木拓先生には、ここに記して感謝を申し上げる次第である。

(はやし せいゆう 立命館大学 文学部／日本学術振興会 特別研究員 PD)